

カナダ，アメリカのサケ・マスの保護活動を研修して

水谷英志

琵琶湖にサケの仲間がいることをご存知ですか、美しい琵琶湖の中には写真のようなピワマス（サケ科）がすんでいます。

サケ・マスといえば北海道が有名ですが、北海道のサケ・マスは産卵のため海から川にのぼってきます。同様にピワマスは3年から4年、琵琶湖に生息し、秋、川に溯上して産卵します。昔は琵琶湖に注ぐ中小の河川に産卵のため、背鰭をきらめかせながら、溯上するピワマスの姿がよく見られたそうです。最近、河川の開発、汚染により、その姿は随分減ってきています。

カナダやアメリカは自然の大切さを謙虚にとらえ、いち早く水質の保護や水産資源の維持対策を精力的に実施しています。既に10数年前にはサケ・マスの人工産卵河川が作られ、魚の立場にたった魚道の整備、環境保護、教育活動が盛んに行われていると聞いておりました。そこで実際に現場を目で見て、学んできたいと思っておりました。幸い、滋賀県には海外派遣研修制度がありますので、あまり英語は話せませんが、カナダ・アメリカへの研修に挑戦して見ることにしました。昭和59年2月20日から3月4日の14日間、土木工学の知識のある同僚と二人で、カナダB・C・（ブリティッシュ・コロンビア）州とアメリカ、ワシントン州を研修してまわりました。目で見、肌で感じたことを重点に、乏しい英語力でもより大きい収穫を得るという意気込みで研修に臨みました。

カナダB・C・州は緯度的には北海道よりも北に位置しており、寒いという先入観がありました。しかも出発前の日本は例年になく豪雪でしたので、防寒具一式に身をつつみ、成田を飛び立ちました。バンクーバーに降り立った時、あまりの暖かさにびっくりし、自らの重装備が全く無駄であったことを悟りました。郊外のスタンレーパークには、クロッカスも咲き乱れ、桜の花まで咲いており、日本の春を思わせる陽気でありました。

カナダB・C・州ではS・E・P・（サケ倍増計画をすすめる国の機関）とS・T・S・（サケを守る運動の民間団体）の活動を中心に、10日間、

近代的な教育施設を備えたふ化場、水族館風魚道、人工産卵河川等、23ヶ所の施設をまわりました。特に、印象深かったのは、ボランティアによるサケ・マス保護の活動と子供達への魚に関する教育活動でした。

ボランティア活動はカナダにおける、サケ・マスの倍増計画に沿って行われております。各自治体には、市民や学生のボランティアグループが組織され、川の環境を守る運動や、素人によるふ化場の運営が活発に行われています。その一つとして2月22に訪れたリトル キャンベル リバーのふ化場は、バンクーバー市から南へ約60キロメートル、アメリカとの国境に近い所にあり、この地域に住む、スポーツフィッシングとハンティングを趣味とする人達のグループが運営しています。建設にあたっては、建設会社がブルドーザーなどの機械を提供し、鉄工場が資材を提供し、町の人々が週末や会社の終わった夕方に働いて作りあげました。完成の後にも会社を退職した人達によって管理・運営されています。小・中学生の課外活動の場としても、採卵や飼育が行われており、まさに手作りのふ化場という感じがします。ここで働いている人は全員素人で、「今までサケを取っていただけだったが、これからは、自然に資源を返し、孫達の時代にもサケがたくさん取れるよう、自分達の町の川にいつまでもたくさんサケがのぼるようにしたい。」という意気込みで活動していました。その他、市民グループは各地にたくさんあり、ふ化場の運営、川の浄化、産卵床の整備、魚道作り等に活動しています。

また、B・C・州全体の運動のひとつとしてはS・T・S・（Save The Salmon）の活動があります。この運動は、1980年にB・C・州の地方新聞「バンクーバーサン」の「サケを守ろう」というキャンペーンから始まりました。多くのふ化場建設、サケの自然公園建設、子供達へのサケ学習、学校へのふ化場建設等をボランティアの力で進めています。メイプルウッドスクール、アウトドアスクールには、その代表的な施設があります。この活発なボランティア運動は、「自分達のサケを

増やし、水をきれいにしなければならない。」という精神と、それ以上に「地元のために何かやろう。」というコミュニティー精神で成り立ち、今後ますます広がっていくものと思われました。

子供達への魚に関する教育活動は、S・E・P・のもっとも大きな特徴として、注目されるものです。「環境問題は小さい時から自ら学ぶことが一番で、サケ学習を体験することで、将来必ず大きな成果が得られる。」という信念で、小川に小さなふ化場を設置したり、子供達の観察、教育の場を建設したりしています。

2月27日に訪れたメイプルウッドスクールはB・C州内で最もサケ・マス教育に関して設備の整った小学校です。教室には大型の水槽を設置し、サケ稚魚の飼育を子供達の管理・観察のもとにおこない、近くを流れる小川にはミニふ化場を作り、卵をふ化させ、飼育し放流しています。2月28日訪れたアウトドアスクールは、日本の林間学校にあたりますが、S・T・S・が建設したふ化場が附属しており、幼稚園から小学6年生までの子供達が、4～5日泊り込んで、色々のレクリエーションを楽しむかわら、サケ・マスの実施学習をしています。ノースバンクーバーの生徒達は年1回必ずこの施設を利用します。

その他、B・C・州では、近代的なふ化場や素堀りの大規模な人工産卵河川をみせてもらいました。しかし、これらはあくまでも補助的なもので、その活動の根源は自然の繁殖を基本に行われています。しかも自然の繁殖を守るために、魚の生息環境を考えたきめ細やかな法律が定められています。例えば、海辺・川・川岸・河床からの砂利採集・産業廃棄物・沼地の浚渫埋立て、農業・土地開発のための土地整備、堤防・水路建設、等においても各々の場合に合った法律が適用され、水産資源を健全に監督・管理できるように整備されています。魚道の設置や山林の伐採について、自然を守ることに留意し、水産資源を保護していく姿勢が貫かれています。日本では、サケ・マスふ化技術は世界でも最高のレベルをもち、各地で行われていますが、その反面、自然を無視し、魚が溯上できないようなダムや堰堤の建設、河川の改修等がどんどんなされています。ダムや堰堤を作るときは魚道を設けよと水産資源保護法にありますが、実際には無視されがちで、行政も手をこまね

ている現状であります。現在の日本の土木工学の技術をもってすれば、魚の登りやすい魚道は楽に作れるはずであります。B・C・州では、サケ・マスの溯上にとって必要であれば、自然にできた岩盤の滝にまで魚道を作っているのです。

B・C・州での研修を終え、2月29日アメリカ、シアトルに向けて、国境をこえるバスに乗込みました。都合で相棒は一週間早く帰国しましたので、アメリカ行きは私一人となりました。まわりを見まわすと日本人は私だけです。途端に心細くなりました。国境では他のアメリカ人、カナダ人はスムーズに通されましたが、私だけは胡散臭げに調べられました。入国管理官は早口でまくしたてますが、皆目分かりません。パスポートと目的と日程を書いた紙を示し、頑張っておりますと、とうとうあきらめたのか書類を自ら記入しだし、入国を許可してくれました。

シアトルではワシントン湖の富栄養化対策やサケ・マスに関する環境保護運動について研修しました。そこでは特に自宅の庭にサケを回帰させるのに成功した歯科医の例と、目で見る水族館風魚道に興味を持ちました。

3月2日にこの歯科医アダムス氏を訪問しました。彼は約400坪の自宅の庭にふ化場と人工飼育河川を作り、5年間失敗を重ねながらも、サケのふ化、稚魚放流をくり返し、みごと自宅の庭の池にサケを回帰させることに成功しました。

次にワシントンにある水族館風魚道を訪れました。これはシアトルの観光コースにもなっていて、日本には全く例のない大らかな楽しい魚道です。観光客は魚道の側面からガラスごしにキングサーモンやギンザケなどが勇壮に溯上する姿を見ることができのです。

3月4日アメリカ、シアトルでの研修を終え、日本へ帰国の途につきました。

最近、自然を大切にということで、魚の放流やつかみ取りの行事が盛んに行われています。しかし、1日だけの行事では、子供達に対する影響力も弱いと思います。教育、啓蒙活動は継続的に実施することにより、より一層、きれいな湖や河川を守ることの大切さを身近に感じさせるのではないのでしょうか。滋賀県では、このような目的で私達の研修を参考にしてミニふ化場や教育施設の建設が検討されています。

海外派遣研修を終え、アメリカ、カナダで出会った技師達の姿勢には感じるものがありました。彼らは水産の技術者として単に魚の研究だけにとじこめるのではなく、積極的に魚の棲む環境に目を向け、守るのに努力している様に見うけられました。魚の棲める環境があつての漁業であることを念頭において、仕事をすべきであり、地域開発は環境悪化にならないかどうか絶えず注意を払う必要があると、彼らは力説しておりました。

我々、日水の水産に携わる者としても、彼らのきめこまやかな環境保護施策の姿勢に学び、21世紀へ向けて、より明るい水産を担っていかなければならないと強く感じました。



写真2 魚の模型を前に先生の説明を聞く子供達

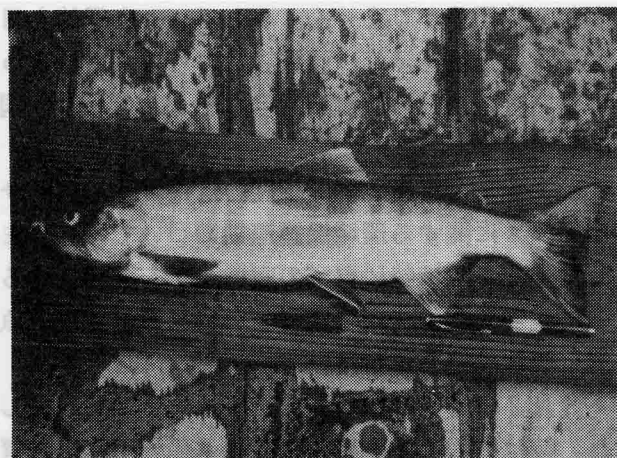


写真1 琵琶湖の固有種Biwa Salmonの雄



写真3 ナナイモにある魚道